

ICT主任によるカリキュラムマネジメント ～授業改善と条件・環境整備に着目して～

1. 研究の背景と目的

2021年に、中央教育審議会より「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」が示された。「令和の日本型学校教育」の構築に向けたICTの活用の基本的な考え方として、GIGAスクール構想を実現し、これまでの日本の教育とICTを組み合わせていくことで、教育の質を向上に繋げることが必要であると述べられている。これまでも、学校教育においてICTの活用は行われてきている。しかし、「令和の日本型学校教育」においてICTを活用することによって目指されているのは答申の副題にもあるように、「個別最適な学び」と「協働的な学びの実現」である。そこで本研究では、ICT主任という立場から、授業における効果的なICT活用を実現するためのカリキュラムマネジメントの推進を目的とした。

2. 研究の内容と方法

実践を進めるにあたって、カリキュラムマネジメント・モデル（田村 2022）を用いて本校のICT教育の現状について分析を行った。

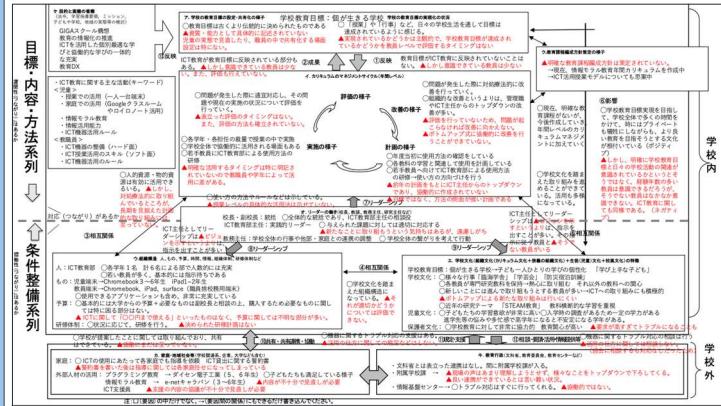


図1 カリキュラムマネジメント・モデル（田村 2022）による本校のICT教育の分析

成果

・各教員の専門性を活かして教科の学習と関連付けながら、ICTの活用を進めていること。

・デバイスの整備等に関して、順調に進めること。

課題

・ルールの整備や情報モラル教育に関するカリキュラムが不十分であること。

・各教員の取り組みが共有されたり、1つのカリキュラムとして根付いたりしていないこと。

以上の分析を踏まえ、

①ICT機器を活用するための条件・環境整備

②ICT活用による個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を意識した授業改善の2点に取り組むこととした。

3. 実践 I (ICT機器を活用するための条件・環境整備)

ICT機器を活用するための条件・環境整備として、まずは情報モラル教育カリキュラム（図2）を作成した。作成にあたって、大阪市教育センターへのヒアリングや満下（2020）の知見を参考とし、各学年の実態に合わせたカリキュラムを作成した。また、手塚（2021）が指摘する情報モラル教育指導に対する負担感や教師間の格差という課題に対する取り組みとして、情報モラル教育授業案（図3）を作成した。年間計画に授業案のリンクを設定し、その授業案には授業の際に使用するコンテンツへのリンクを設定することで、教師間の指導や格差や負担感を減らすことができるようとした。本カリキュラムの実施を通して、校内で系統的に情報モラル教育を取り組むことができるようとした。また、児童向には、「ICT機器の使い方について」（図4）を作成し、統一した指導を行うことができるようにした。



図2 情報モラルカリキュラム

図3 情報モラル教育授業案

ICT活用における条件・環境整備の継続的な発展のポイント

カリキュラムマネジメント・モデル（田村2022）で示されている環境整備とは、ICT活用の場合「端末の管理やインターネット回線」といったハード面に目が行きがちであるが、「学校としての共通ルール作成」「情報モラル教育の系統化」「保護者への啓発」といったソフト面の整備が欠かせない。また、教員が指導に負担を感じることなく、学校として統一した方向性をもって指導するとのできる体制を整えることが重要である。



図4 「ICT機器の使い方」

6. 考察

個別最適な学びと協働的な学びーー的的な充実のポイント

「白紙共有」「他者参照」「途中参照」の視点を取り入れた複線型授業に繋がる授業を進めることで、学習者同士が考えを「視覚的に共有し合う」環境が生まれ、問題解決において思考の広がりが促される。児童の主体性を尊重しつつも、学びの方向性を導くための教師の支援が欠かせない。一方で、授業の形態に捉われるのはなく、目的を明確にして指導者や学習者が学習の方向性を選択することが重要である。

4. 実践 II (個別最適な学びと協働的な学びの視点からの授業改善)

中央教育審議会が示す「個別最適な学び」と「協働的な学び」は非常に抽象的なものであり、教員それぞれによって捉え方が異なってくると考えた。そこで、本校のICT教育部で、個別最適な学びと協働的な学びを実現している姿についてイメージの共有を図り、ICT教育部としてめざす姿と授業について協議を行った。（図5）



図5 ICT教育部で協議した内容

以上の協議をもとに本校ICT教育部では、それぞれの学びの姿を以下のように定義した。

・個別最適な学び

自分の学びを振り返りながら、目標（めあて）に向かって、自分に合った学び方やペースを選択して学びを進めていく姿

・協働的な学び

個別最適な学びをより進めていくための足場として、他者と比べたり、共有したり、練り上げたりして自分の学びをよりよくしていく姿

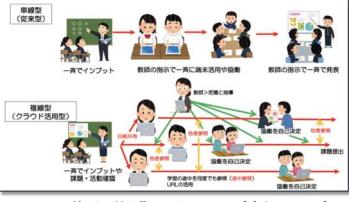


図6 複線型授業のイメージ（高橋2022）

授業実践を進めるにあたっては、高橋（2022）の提案するクラウドを活用した複線型授業を参考に実践を行った。個別最適な学びと協働的な学びの両面を充実させるためのポイントは、コラボレーションホワイトボードアプリFigJamを活用した資料読解（図7）である。ボードは4人編成の班で1つ共有していた。そして、そのボードに資料を添付するようにした。児童は、それぞれが関心を持った資料や、自分が考えを広げやすい資料を選択して調べていた。中には、資料を調べる過程でもった疑問をもとにして、さらに調べたいことをインターネットで調べる児童もいた。

また、FigJamでは班で1つのボードを共有しているため、友達が資料からどんなことを考えているかを視覚的に捉えることができた。さらに、FigJamでは付箋同士を矢印で繋げることができるので、友達が書いた考え方や疑問に、自分の考え方を繋げていく児童も見られた。



図7 FigJamを活用した資料読解

5. 結果 (ICT教育部へのインタビュー)

本研究の成果と課題を明らかにするために、集団インタビューを行った。

対象：ICT教育部の教員 計5名

質問項目：

- 【1】ICT活用による個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けての成果について
- 【2】ICT活用による個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けての成果についての2点について半構造化インタビュー

インタビューの文字起こしを行い、その中のキーワードとなる語句や共通して登場している語句についてマーキングをすることを通して、成果と課題について分析を行った。結果は右表の通りである。

成果

・情報モラルの定着。トラブル予防の意識向上

・個別最適な学びと協働的な学びを意識した実践の推進

・学級単位ではなく学年単位での実践の推進

課題と改善策

・系統的なカリキュラムの不足による指導のばらつき

・本当に学びが深まっているのかという疑問（ICT活用による深まりを見とることができない）

ICT活用に関する
カリキュラムのさらなる充実が必要

ICT主任としてのカリキュラムマネジメント推進のポイント

カリキュラムマネジメント・モデル（田村2022）に記されている様々な要素の関連を考えながら「子どもの学びをマネジメント」することがカリキュラムマネジメントである。ICT教育推進にはあたっては、「組織構造」「学校文化」「家庭・地域社会等」などの要素を鑑みて、カリキュラムのマネジメントサイクルを考える必要がある。また、ICT主任としてのリーダーシップも重要である。（報告者の場合は、サーパントリーダーシップの側面が強かったと言える。）